

京浜間鉄道開通（明治五年）

高い利子を払って外債を募集し、機関車、客車は勿論の事、枕木まで外国から買い求め、設計その他一切を外国技師に頼んで、やっと京浜間七里の間に汽車が開通することになった。

開通式当日は、天皇自ら衣冠束帯の威儀を正して、試乗された。

当時一日の往復回数約四回、上・中・下に分かれた汽車賃は、上等・一円十二銭五厘、下等・三十七銭五厘。

米、一升の値段が三、四銭の時代で、随分高いものであった。

沿線には毎日、黒山のように見物人が集まり、煙を吐いて進む、「岡蒸気」にたまげたものであった、という。

田舎から、わざわざ見物に来た年寄りには「これも長生きしたお陰だ」と、土下座して拝んだそうだ。

踏み切り番が、いかめしく刀を差して警戒したなどという事など言われたが、さも、ありなんという滑稽な事件であった。

